



## 歯科医・彌勒寺寛之の 後悔しない 歯科治療の受け方

## 第23回 「親が知る、親知らず」

親知らずは前から8番目に生えてくる歯です。第3大臼歯、智歯、知歯ともいいます。20歳前後に生えてきますが、生えてこない人も多くいます。

名前の由来ですが、昔は寿命が短かったため、親が子供の歯(親知らず)が生えてくるのを知らずに亡くなったので、「親知らず」という名前が付けられたと言われています。英語では「wisdom tooth」(智歯)と言います。これは、これは物事の分別がつく年頃になってから生えてくる歯であることが名前の由来と言われています。

きちんと生えていれば咬む機能が向上します。手前の歯を失った時に、ブリッジや入れ歯のバネをかける歯として使用することもできます。また、失った歯の部分に親知らずを移植することもできます。

また、親知らずを歯の銀行に預けて保存し、虫歯や歯周病などで歯を失った時にその歯を再び自分の口の中に戻し、歯として機能させることもできます。歯の銀行は2004年に広島大学で開発され、2009年までに700本以上の歯が預けられ、100本以上の歯が口の中に戻されています。

さらに近年、親知らずを再生医療に使用する取り組みがおこなわれています。2010年、産業技術総合研究所は親知らずの細胞(歯胚)から様々な組織の細胞になるとされる「人工多能性幹細胞(iPS細胞)」を作ることに成功しました。これまでおこなわれていた皮膚の細胞から作る方法よりも100倍以上効率が良く、できたiPS細胞から腸や軟骨、神経、心筋の細胞ができることも確認されました。

従って親知らずは、必ずしも抜く必要はあり

ませんが、大きな虫歯がある、腫れや痛みを頻繁におこす、しっかり清掃できない、歯並びに影響がある、矯正治療の妨げになる、隣接する歯の虫歯の原因になる、などの場合は抜歯の対象となります。親知らずの抜歯は当院でも行なっていますが、抜歯の際に神経や血管を痛める可能性が高いときや重度の心臓病、糖尿病など抜歯のリスクが非常に高いときは、対応可能な病院をご紹介しますのであります。

親知らずに限らず、歯を抜いた後は腫れたり痛みが生じることがあります。ほとんど腫れや痛みが生じないものから、2週間ほど腫れや痛みが続くものもあります。通常は薬の服用により、症状は軽減されます。

上あごよりも下あごの親知らずの方が、まっすぐに生えている親知らずよりも横に生えている親知らずの方が腫れや痛みが生じやすい傾向にあります。

抜いた部分は血が固まり、歯肉をくっつけます。過剰なうがいなど何らかの原因で固まった血が取れてしまうと、周囲の骨がむき出しになり、激しい痛みが生じます。この状態を「ドライソケット(抜歯窩治癒不全)」といい、むき出しになった骨が覆われるまで、抜歯後1~2週間痛みが続きます。抜歯後に長く痛み続く原因の大半がドライソケットによるものです。

汚れや歯石がたまったり、疲れ、風邪、ストレスなどで抵抗力が落ちると腫れやすくなりますので、生活習慣に注意して、毎日の歯みがきをしっかりとするだけでなく、定期的に歯科医院で歯の清掃(クリーニング、PMTC)をおこなうのがよいでしょう。



～著者プロフィール～

土沢デンタルクリニック院長 彌勒寺 寛之(みろくじ ひろゆき) 1979年東京生まれ  
住所 宇都宮市本丸町11-12 TEL 028-634-5141 (URL) <http://tda86.com>

所属学会

日本口腔インプラント学会 日本歯科審美学会 日本歯周病学会

日本小児歯科学会 日本ヘルスケア歯科研究会

※学会で得た知識を活かして、個人的に無料相談室を開設しました。

お口のことで疑問に思っていることなどがありましたら、お気軽にご相談下さい。

当クリニックのホームページからメールで受け付けています。

(この無料相談室は予告なく終了することがありますので、ご了承下さい。)

